

報道関係者各位

プレスリリース：第4回 堂島リバービエンナーレご案内

平成27年5月7日

堂島リバービエンナーレ2015 “Take Me To The River”同時代性の潮流

堂島リバーフォーラムではこの夏4度目となる「堂島リバービエンナーレ2015」を開催致します。アートをさまざまな分野とつなげることで、新たなアートの地平を浮かび上げていきます。

第一回目では、南條史生氏（森美術館館長）をアート・ディレクターに迎え「リフレクション：アートに見る世界の今」という展示を行いました。グローバル社会の中で、金融危機や地域紛争、貧困問題など、社会の諸相を提起する、世界各国からのアート作品が並び注目を集めました。

第二回目では、飯田高誉氏（森美術館理事/インディペンデントキュレーター）をアーティスティック・ディレクターに迎え「ECOSOPHIA（エコソフィア）」と題した展示を行います。これからの地球のあり方を、アートと建築というテーマのもとに自然環境、社会環境、人間の心理の3方向から考察する場となり未来に向けての地球ヴィジョン、新たな自然観、世界観を指し示す空間を会場全体で表現しました。

第三回目では、台北をベースに現代アートコレクターとして活躍しているルディ・ツェン氏をアーティスティックディレクターに招き、タイトルを「Little Water」として開催しました。川が人々の日常の暮らしに大きな役割を果たしている姿、流れる川の美しさや水の多様性からインスピレーションを得て「豊かな文明・文化は川沿いから始まる」をテーマにしました。

今回は、英国よりTom Trevor（トム・トレバー）をアーティスティックディレクターに迎え「Take Me To The River 同時代性の潮流」を題した展示を行います。

ぜひとも貴媒体にてお取り挙げいただき、ご取材いただけますよう、心よりお願い申し上げます。

堂島リバーフォーラム
プロデューサー 古久保 ひかり

“Take Me To The River”コンセプト

鴨長明が書いた「方丈記」(1212年)の出だしの一節「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず」は、日本文学における“無常”の表現として大変良く知られている。一方、これと驚くほど似た表現が西洋にもある。ギリシャ哲学者のヘラクレイトスは、紀元前500年頃、「同じ川の流れの中には再び入ることはできない」と述べ、「万物は流転する」という有名な言葉を残した。また最近では、スペイン出身の社会学者マヌエル・カステルは、その著書「ネットワーク社会の出現」(**The Rise of Network Society**, 1996)の中で、急速に技術革新を続ける情報化時代の「流れの空間性」という問題を指摘している。グローバル化した流動性により、人と社会とかわりにおいて固定された場所よりも時間の流れがますます重要となってくる。

テイク・ミー・トゥー・ザ・リバーは、現代における「流れの空間性」と、そこに現れる変容と交換を探る展覧会である。今日の世界は、歴史上、前例のない多様性によって特徴づけられる。本展では、そうしたグローバルに錯綜した様相を、今日の現代美術を通して検証すべく、「川」という比喻を用いる。従来の共同体的な場に依拠したセルフ(自我)の概念は失われ、それに代わり、より流動的な「ネットワーク・カルチャー」という場に依拠したセルフが現れている。果たして、個々のアーティストの主観的な在り様が、こうした新たな状況においていかに機能し、また変化をもたらさうか。この展覧会はそうした物の見方を喚起する。

タイトルの“Take Me To The River”は、ソウル歌手、アル・グリーンとギタリスト、メイボン・ティーニー・ホッジスによって1973年に書かれたR&Bの名曲にちなむ。その歌詞は、ロマンスへの憧れと神への祈りが混ざったもので、その相互が交錯することはない。それはまさに、常に流転し続けながら刻々と変化し続ける川の流れ、流動するものの本質を象徴的にするものでもある。

アーティスティック・ディレクター トム・トレバー

開催概要

展覧会名 : 堂島リバービエンナーレ2015

テーマ : "Take Me To The River" 同時代性の潮流

会場 : 堂島リバーフォーラム(大阪市福島区福島1-1-17)

会期 : 7月25日(土)~8月30日(日) 会期中無休

開館時間 : 11:00-19:00(入館18:30まで)

入場料 : 一般1,000円、高校・大学生 700円、小学・中学生500円

主催 : 堂島リバーフォーラム

企画制作 : 堂島リバーフォーラム

特別協賛 : 大和ハウス工業株式会社

協賛 : サントリーホールディングス株式会社/株式会社ECC/NTT西日本/コクヨ株式会社
株式会社ヤマノアンド アソシエイツ/アートコーポレーション株式会社

後援 : 大阪府/大阪市/大阪商工会議所/一般社団法人 関西経済同友会、
公益財団法人 関西 大阪21世紀協会/グレートブリテン・ササカワ財団/在京都フランス総領事館
アンスティチュ・フランセ関西/朝日放送株式会社/ FM802 / FM COCOLO

協力 : 株式会社ナイルスコミュニケーションズ/京阪電気鉄道株式会社/TOKK/一本松海運株式会社
株式会社ハートス

参加アーティスト : アンガス・フェアハースト/ピーター・フェンド/サイモン・フジワラ/メラニー・ギリガン/池田亮司
メラニー・ジャクソン/笹本晃/島袋道浩/下道基行/マイケル・スティープンソン
ヒト・スタヤル/スーパーフレックス/照屋勇賢/プレイ/フェルメール&エイルマンズ

アーティストック・ディレクター : Tom Trevor (トム・トレバー)

参加アーティスト、代表作

アンガス・フェアハースト (1966年イギリス・ケント生まれ, 2008年没)

英国の作家アンガス・フェアハーストは、いわゆる90年代に登場し、その後、世界の現代美術界に多大な影響を与え続けるいわゆるYBA (Young British Artists) の一人である。

作品のジャンルは、彫刻、絵画、パフォーマンスと多岐にわたり、自意識や欲望、広告、大量生産、大量消費といったテーマを扱う作品が多い。特に、ファッション雑誌のモデルの姿を切り抜いてコラージュ風にアレンジした作品は有名で、モデルの不在を通してそれを焦点とする見る者の欲望や自意識を浮かびあがらせる。



ピーター・フェンド (born 1950, US, lives in New York)

ピーター・フェンドは、ジェニー・ホルツァーやリチャード・プリンスなどがニューヨークに設立した"OFFICES"と呼ばれる組織体を発展させた一種の会社組織「オーシャン・アート」の設立者として知られる。この組織は地球規模の環境問題をテーマにした作品を手掛け、世界中で発表している。

フェンド自身が手掛ける作品としては、海を中心に据えて世界を再構築した地図のような平面作品が特に有名である。陸地と海面を入れ替えるという逆の視点で世界を眺めることにより、人間中心の世界観が大きく揺らぎ、エコロジーに向けた新しい意識が立ち上がってくる。堂島リバービエンナーレの展示もこのタイプの作品を予定している。



参加アーティスト、代表作

サイモン・フジワラ(1982年ロンドン生まれ，ベルリン在住)

サイモン・フジワラは日本人の父と英国人の母の間に生まれ、幼くして両親が離婚し、英国の母のもとで育てられた。彼は、自身の人生のバックグラウンドを素材として、そこに事実とフィクションを絶妙な配合で交錯させながら作品化する。堂島リバービエンナーレでは、彼が若いころに別れた父との再会をテーマに、陶芸家である父とともに浜田庄司やバーナードリーチの作品の再制作に取り組むというもの。ビデオと立体作品から構成されるこの作品において、国籍の違う親と子が離れて暮らしてきた時間の重みを描くために、ユーモアをちりばめた衝撃的な結末が用意されている。



池田亮司 (1966年 岐阜生まれ，パリ在住)

池田亮司は、電子的な音源やデータそのものを作品化し、それらをビデオプロジェクションとリンクさせた壮大なインスタレーションとして構成する。彼は、人間の耳がかろうじて聞こえる周波数を使うなどして、音楽の「生の状態」を浮かび上がらせる。ノイズやパルスといった要素を駆使した一種の「音による造形作品」は、その高い創造性において国際的に高く評価されている。



参加アーティスト、代表作

メラニー・ジャクソン(born 1968, Hollywood, UK, lives in London)

メラニー・ジャクソンの作品は、作家自身の存在が作品の主題を形作る要素の中から浮かび上がってくるという、独特の作風を持つ。彼女にとって展示は実験の場であり、記録、音楽、ビデオ、パフォーマンスなどあらゆる手法を用いてアートにまつわる様々な問題を浮かび上がらせる。出品作品は、座礁した大型コンテナ船をモチーフにした紙で出来たジオラマ的なインスタレーションを予定。この作品が会場におかれることにより生じる様々な状況— 作家の意図、展示の見え方、作品の構成が示す意味—それらがすべて見るものに投げかけられた疑問となる。



下道基行 (1978年岡山生まれ、名古屋在住)

下道基行の作品の素材は旅である。自らが移動し、未知なる世界へと介入していくことで発生し、また発見される事物や価値が作品として転化される。鳥居シリーズでは、第二次世界大戦中に日本の植民地に建てられた現存する鳥居を巡り写真に収める旅であり、橋のシリーズでは、2つの領域をつなぐものとして橋をとらえ、そうした観点で生じる「橋」の姿を写真に収めていく旅である。



参加アーティスト、代表作

プレイ (アーティストグループ 1967年関西で結成、現在も活動中)

屋外を舞台に「特になんらかの理由を持たない行為」を行うことを目的としたアーティスト・グループ。1967年に様々な背景を持つアーティストが集まって関西で結成。60年代から現在に至るまでグループとして活動が続いている極めて稀有な存在として、戦後の日本現代美術史に名を残している。「野外での永遠の時間と行為」を志向すると述べる彼らは、自らの行為を、プレイ（あそび）であること、誠実であること、ユーモアがあることに意識を置いて活動続ける。彼らの最も有名なパフォーマンスとして、淀川を矢印の形状をした筏にのって下るものがある。矢印の形状が示す志向性と、その行為の無目的性が、激しくせめぎ合うこの作品は、近年パリのセヌ川でも行われて話題となった。



笹本晃 (1980年横浜生まれ、ニューヨーク在住)

ニューヨークをベースに活動する日本人アーティスト。パフォーマンス、彫刻、ダンスなど、自らの芸術的な目的を追求する上でもっとも有効な手段を柔軟に採用し、作品として表現する。また様々なジャンルのアーティストたちとのコラボレーションも多く行う。堂島リバービエンナーレでは、内部に鍵が閉じ込められた氷の塊を多数吊るし、そこから溶け出した水が下に置かれた金属のボールにあたって生じる音をアンプで増幅する作品を展示する。



参加アーティスト、代表作

島袋道浩（1969神戸生まれ、ベルリン在住）

あるテーマ性を持って世界を旅し、そのテーマをきっかけとして生まれた出会いや経験を作品化するアーティスト。片方の眉毛をそった状態でヨーロッパの11か国をめぐる旅に出た「作品」では、その奇妙な表情を持つ日本の青年に対して寄せられた人々の好奇心や友情を、写真、ビデオ、ドローイングなどで構成されたインスタレーションを通して見るものに伝える。



照屋勇賢（1973年沖縄県生まれ、ニューヨーク在住）

照屋勇賢は、日常的にありふれたものを素材に、それらに手を加え、その様相を変容させることで現代社会の様々な問題をあぶりだす。着物、宅配ピザの箱、新聞記事などが、超絶的な技法によって別の意味を帯びた存在に転化される。堂島リバーフォーラムでは、マクドナルドの紙袋の表面を樹木の形状に切り抜き、袋の内側に一幅の自然の風景を表現した作品を展示する。



参加アーティスト、代表作

フェルメール&エイルマンズ (1973年 1962年ベルギー生まれ、ブリュッセル在住)

2006年から活動するベルギー出身の二人組のアーティストユニット。アート、建築、経済活動の3者間を結ぶ関係性のダイナミズムに焦点を当てた作品を手掛ける。彼らは自らが住むブリュッセルのアパートそのものを作品として位置づけ、自分たちのプライバシーを保持しつつ、その中を外部から覗き込む視点を、ビデオ、パフォーマンス、インスタレーションといった手法で提供する。最近手掛けているART HOUSE INDEX (AHIー) は、作品としての住まいを経済原理に取り込む新たな方法である。アートの原理は、経済と同様、信用を基盤とした一つの制度であり、マーケットはその信用が実践として機能する場である。堂島リバービエンナーレでは、こうした問題意識にもとづいた新作の映像作品MASQUERADEを出品予定である。この作品は、高度に成長したマネー経済とグローバル化しアートマーケットをモチーフとしたもので、この作品と平行して、インテリア雑誌の体裁をとった経済とアートの価値について考察する出版物も作品として展示する予定である。

